



社會運動と社會進化：大正十三年二月十二日神戸高等商業學校商業研究所第八回講演會に於ける講演

坂西，由藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 36(5):653-665

(Issue Date)

1924-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053648>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第三十六卷

第五號

(大正十三年
五月二日發行)

論

說

社會運動と社會進化

(大正十三年二月十二日神戸高等商業學校
商業研究所第八回講演會に於ける講演)

坂 西 由 藏

一 華開五葉。結果自然成。
織者日以進。耕者日以退。作其功一也。

一

吾々の社會生活は絶えざる進化の道程を辿りつゝあるものであります。さうして此の道程は記録の存せざる過去に遡り、吾々の知識を以て見通すことの出来ない遠き將來に及ぶものであります。即ち、此の長き絶えざる道程の上に社會の

進化は極めて徐々として、しかも確實に行はるゝものであります。

今此の社會の進化は恰も一步一步階段を上ぼり行くやうなものである。しかも此の階段は際だちて認められるのではない。それは目に見えないこまかい限りなき刻み目である。此の無限の刻み目を歩みて、日を経、月を重ね、年を閲し、翻つて社會が通過し去つた所の道程を顧るならば、そこには驚くべく大なる變化が起つて居るのである。今日の社會狀態は昨日の社會狀態と變りがないやうに見え、明日の社會狀態はまた今日の社會狀態と異なる所がないやうに見えるでありませう。併しながら何れかの瞬間に於て、其の時の社會を凝視し、顧みて之を一年前、五年前、或は十年、二十年前の社會と對照するとき、何人ぞ「雖も隔世の感なきを得ないものであります」。

此の見えざる、しかも驚くべき變化の間に秩序的發達の跡は歴然として吾人の眼に映じ來るのであります。勿論其の變遷の間には幾多の起伏波動がある。社會は時には退歩したかのやうに見えることもある。けれどもそれは一時の反動的現象であつて、やがて來るべき上進運動は既に其の中にはぐくまるゝものである。是に於て其の時、其の時に現はるゝ特徴を捉へて社會生活進展の絶えざる長

き道程を『發展階段』に區劃するの試みが起る。それは恰も緩慢なる勾配を以て上ぼりつゝある、坂路に石段を築かんとするが如きものである。しかも、社會發展の各階段には其の階段に特徴づけられたる典型的形相のみが雜りけなく現はれて居るのではない。前の階段に於て其の特徴と看做さるべき制度現象が後の階段に於ても歴史的遺物として尙其餘命を保ち、後の階段に於て初めて其の特徴となり來るべき制度現象が既に其の前の階段に於て萌芽を發する事も稀ではない。それであるからして、社會生活變轉の途上に立ちて時代の特徴を捉へ、發展の階段を劃し、社會進化の理法を發見することは、雜多の間に統一を認め單一の間に差別を辨じ得る達識の學者に俟たなければならない。而して吾々は、かかる尊敬すべき學者の活眼に映じ、其の透徹せる頭腦を以て解釋せられたる所に依りて、感謝すべき多くを教へられたのであります。

二

併しながら、一の社會狀態から他の社會狀態への推移が何に依りて『進化』と名づけられ得るのであるか。社會生活の徐々たる變遷は水平線上に横たはる所の

道程に於て行はるゝのではなく、まして水の低きに就くが如くに限りなき斜面を下だりつゝあるものと見ることは出来ない。それは常に高處を指さす所の絶えざる上進運動であると考へられる。然らば其の指さす所の高所とは何であるか。神戸を發して大阪に向ひ、大阪を發して京都に向ふ所の列車が上ぼり列車と呼ばれるのは、それが刻々に東京驛に近づきつゝあるからである。同様に吾々の社會生活の變轉に進化を認め其の道程に發展階段を劃せんとする者は、有意無意の間に、それが窮極の理想に向つて近づきつゝある運動——最高の價值によりて引かれつゝある運動——であると同前提するものである。然らば此の社會進化の窮極の理想は果して捕捉することの出来るものであらうか。これが私の先づ以て考へなければならぬ問題である。

此の問題に對する私の答は否定的であります。私は嘗て『經濟的文化發達の道程に於ける二傾向』神戸高等商業學校商業研究所講義集第一輯。大正十年二月發行なる講演に於て、文化發達の極致は何であるかといふことは學問的認識の外に在るものなることを論じた。吾人の社會生活が窮極に於て到達すべき境地が何であるかは到底我々の知識を以て豫見することの出来るものではないのであります。しかも前に述べた通り人

間が生物として絶えず進化しつゝあるやうに、社會生活も亦絶えざる進化の道程を辿りつゝあるものであつて、さうして所謂進化とは窮極の理想に向つて近づきつゝある運動であると考へなければならぬ。即ち其の終局の到達點が如何なるものなるかは分らないが、其の運動が常に高き理想を指さすものたるに相違ない。それであるからして私は、吾々の社會生活が吾々の知識を以て豫見し得べからざる即ち學問的に認識し得べからざる、或る理想に向つて進みつゝあるものと見るの外はないと考へるのであります。

三

此くの如く社會進化の窮極の理想は之を知る事の出来るものではない。しかも社會進化の事實は歴然として存する。現在の社會狀態を以て五世紀前、十世紀前又はそれ以前の社會狀態と比較し、或は文化民族の生活と原始民族の生活とを比較する者は社會進化の事實を否む事が出来ない。吾々の社會生活の窮極に於て到達する所が何であるかは分らないが、其の絶えざる變化が常に高處を指すものなる事は疑を容れないのである。而して所謂社會進化なる言葉によりて指

ざさるゝ所の事實は如何なるものであるか。此の點に就いては、行論の順序として私が前の講演に於て述べた所を簡單に繰り返したいと思ふ。

私の見る所を以てすれば、所謂社會進化なる言葉によりて指ざさるゝ所の變化は畢竟するに吾々の生活の爲に與へられたる條件の上に益、多くの精神並に肉體の力を加へること、即ち吾々の置かれたる環境に益、多くの人工を加へること、換言すれば自然に加ふるに益、多くの人間性を以てすることに外ならない。

さうして此の社會進化の過程は個人より個人へ、階級より階級へ、又民族より民族への連鎖を通じて間斷なく行はるゝものである。個々人の生命には限りがある。けれども一個人が其の精神的並に肉體的能力を發揮することに依りて成し遂げた所は他の個人に傳はり、之を傳へた所の個人はまた、自己努力の結果を之に加へ之を鍛鍊して更に其の後に來る者に傳へる、かくして人間努力の所産は生滅流轉極まる所なき個々人を通じて永遠より永遠へと傳はり、其の間に絶えざる進化が營まるゝのである。社會階級の生命は個人の生命よりも長い。けれども、社會に於て支配的地位を占めた所の階級は絶えず交代した。さうして、其の時に於ける支配階級が其の時代の精神的並に物質的文化の發達を荷ふ者であつた。そ

れであるからして文化發達の本流は各時代の支配階級を通じて貫流するものであります。而して民族の生命は更に之よりも長い。けれども個々の民族は或は興り、或は衰へ、或は他を支配し、或は他に制せられた。さうして此の民族の盛衰興亡の間に人類文化の流れは進行した。一の時代に於て文化の中心をなした所の民族は、たとひ滅亡すると雖も、其の間に養はれた所の文化は決して亡ぶるものではない。民族は亡ぶることがある。けれども文化は亡ぶるものではない。即ち其の文化は次の時代に於て振ひ興る所の他の民族によりて繼承せられる。さうして之を繼承した所の民族は更に之に新たなものを附け加へて他の民族に傳へるのである。即ち興れるも、亡べるも、一切の民族は畢竟文化の所産を永遠に傳ふる所の脈管として働いたのであります。

かやうに個人より個人へ、階級より階級へ、民族より民族へ傳へらるゝ所の文化の絶えざる發達は個性の發達と其の全能力の發揮とによりて實現せらるゝものである、さうして其の爲に人類文化發達の道程には繰り返して二つの傾向が現はれた。其の一は、分化の傾向であつて、分化したる個性は相觸れ、相當り、相摩擦し、相鍊磨することが出来る。しかも分化の傾向が過度に行はるゝ時は、社會の諸階級

中力強きものが力弱き者を壓倒し、壓倒せられたる者は其の爲に全能力の發揮を妨げられ、即ち其の力を社會全體の發達の爲めに致すこと能はざるに至る。それであるからして、分化の傾向が進みすぎる時には、おのづから第二の傾向が現はれて必要に應じてこれを掣肘することとなる。此の第二の傾向とは即ち平準化の傾向であつて分化したるものを或る平準に歸せしめんとする、作用を營むものである。

以上は私の前の講演に於ける所論の要點である。所が分化の傾向と共に通常考へらるゝ集化の傾向は文化發達の道程に如何なる地位を占むるものであるかといふに、分化の傾向と集化の傾向とは同時現象である。分化の度の進むことは之に應じたる集化の度の進む事に外ならない。此の二つの言葉に代ふるに、分裂作用及び集合作用なる言葉を以てするも妨げない。社會がそれぞれの個性を荷ふ所の多くの單位に分裂することは又やがて之等單位の綜合によりて生ずる社會組織の發達する所以である。分化の作用及び之に應じたる集化の作用と平準化の作用との交代連續の間に社會の進化は編み出だされる。

此の二つの傾向の繰り返しは之を水の波動にも比すべきものである。即ち一

は男波であり他は女波である。男波より女波へ、山より谷へ、一高一低、一起一伏の間に社會は其の行く所に行くのである。但し水の波動に於ては常に一定の水準が保たるゝに反して、人類社會の波動は常に高所を指ざして進むものである。第一波よりも第二波、第二波より第三波は高き地位にたゝねばならぬ。但し私の考へは男波の次には必ず女波が來り、さうして又男波が起らなければならぬといふ必然的法則を樹立せんとするものではない。唯今日までの社會進化の道程に此くの如き繰り返しが起つたといふに過ぎないのであります。

四

吾々の社會生活は絶えず窮極の理想に向つて進展しつゝある。此の窮極の理想が何であるかに對しては何人も之に答ふるに由がない。しかも各自其の判斷に基づき如何なる社會狀態が理想的であるか、如何なる社會の到來が望まじきかに就いて其の意見を立てる事は自由である。固より之に依つて社會生活の窮極に於ける到達點が定めらるゝのではない。社會進化の理想は多數決に依りて定められ得るものではない。各自が望ましとなす所の社會狀態は唯其の人の抱懷

する所の理想たるのみである。

此の意味に於ける理想は人によりて異なり、階級によりて異なり、又時代によりて異なるものである。封建時代と資本主義時代とは二箇の異なりたる人生觀、即ち二箇の異なりたる理想の對立である。而して一時代に於ける支配階級の理想とする所と、之に對立して擡頭しつゝある階級の理想とする所とは同じきを得ない。封建時代に於て武士の階級と町人百姓の階級とは全く別箇の人生觀を有し、異なりたる理想によりて導かるゝ者であつた。現在の資本主義的生活に於て有産者階級と無産者階級とが社會の將來に對して抱懷する所の意見を異にし、如何なる社會組織を以て望ましとなすかに就いて考ふる所を同じくしないのは已むを得ざる所である。

されば社會生活が絶えず進化しつゝあるやうに社會將來に關する思想も時と共に進展するものであります。而して社會生活全般の進化に就いて前に述べた所と同様に、社會思想の進化も亦個人より個人へ、階級より階級へ、民族より民族への道程に於て分化の傾向と平準化の傾向との交代連續の間に行はるゝものである。

社會生活の發達につれて社會思想は分化し、分化したる思想は相觸れ、相當り、相鍊磨せられる。而して社會の將來に關する幾多の思想の中其の何れが正しくして其の何れが誤れるかを斷定すべき標準は存しない。何となれば社會生活の發展の極致は何であるかを確める事が出来ないからであります。若し社會の窮極に於て到達すべき境地の何であるかが豫見せられ、確められ得べきものであるならば、幾多の思想中何れを取り、何れを廢すべきかを選択する事が出来るであらうが、其の境地の捕捉し得べからざる限り何人も他人の思想を絶對に否認することは出来ない。況んや自己の抱懷する所の理想を以て正しとなし、さうして之を他人に強ふる如き事は許されないのである。福田博士は嘗て如何なる思想も之を撲滅すべからず、唯之に對抗し得べきのみと斷せられた。又日本の或る政治家は思想は之を取り締ることを得ずと述べた。然るに近時日本の思想界は甚だ混沌たるものであつて、之を歸一せしめなければならぬと云ふ者がある。けれども、歸一すべきものはおのづから歸一するであらう。思想の分化は其の進化の爲めに必要である。又或は外來思想が社會を毒すとなす者もある。然しながら、思想の進入は如何なる權力を以てするも之を堰き止める事の出来るものではない。佛

像を毀ち、マリアの畫像を足の下に蹂躪すると雖も、佛教思想の傳來も、將た基督教思想の流布も、之を防止することが出来なかつた。しかも此等外來思想は日本在來の思想と結合して之を進展せしめたのである。憂ふべきは外來思想の進入ではなくして其の鍛鍊せられざることに在る。泥團の上に舶來の鍍金を施すも只一撃の下に粉碎せられんのみ。在來の思想の中にも、外來の思想の中にも、金玉もあり瓦礫もあるであらう。けれども玉石共に之を包容し、之を陶冶し、之を鍊磨し得る社會に於て初めて思想の進展顯著なる事を得るであらう。

總べての思想は相影響し、又相牽制する。さうして其の間に若干の思想は異中同を求めて合一する。是れ即ち思想の平準化である。併しながら合一したる思想の中から、やがて又思想分化の傾向が起る。かくして一切の社會思想は鍊磨せられ、全體の力を以て進化の一階段を上ぼるのである。

五

社會運動に就いても亦さうである。如何なる社會狀態が理想的であるか、如何なる社會の到來が望ましかに就いての意見の異なるに従つて、其の實現を目標

として異なりたる社會運動が起る。さうしてそれ等の社會運動の中、其の何れが是にして何れが非なるやを決すべき標準は存しない。左傾する運動もあり、右傾する運動もある。前方に突進せんとするものもあれば、後方に引き戻さんとするものもある。此等一切の運動の相互の影響と、相互の牽制と、摩擦と、練磨とによる綜合の結果、社會生活は一階段を進められる。而して社會生活が一階段を進むは社會進化の窮極の理想——吾々の知識を以て豫見し得べからざる最高の理想——に向つて一步を近づける所以である。それであるからして總べての社會運動は、其の全體の力によりて社會進化の窮極の理想に近づぐべき方向を發見する爲めに存するものであると考へる事が出来るのであります。